

蘭亭序 (1)

永和九年

えいわ

きんねん

永和九年、歳は癸丑に在り。

永和九年（三五）、癸丑の歳、

暮春之初め

ぼしゆん の はじ

會

かい

す

禊事

けいじ

を

脩

おし

むる

也

なり

會稽山陰之蘭亭に

かいけい

さんいん

の

らんてい

歳

とし

は

癸丑

きちゆう

に

在

あ

り

暮春の初め、會稽山陰の蘭亭に會す。

禊事を脩むるなり。

三月の初め、會稽山陰の蘭亭に集ったのは、禊を行なうためである。

群賢畢

ぐんけん

く

至

いた

り

少長

しうちやう

咸

み

な

集

あつ

まる。

群賢畢く至り、少長咸な集まる。

立派な人たちはすべて至り、老いも若きもみな集った。

【参考文献】二玄社 精選 拡大法帖2 蘭亭序 馮承素摹本 東晋 王羲之

マール社 書聖名品選集2 王羲之 蘭亭序・十七帖

蘭亭序 (2)

此の地

こ

の地

ち

崇山

すうざん

峻領

しゅんれい

茂林脩竹

もりん

しゅうちく

有り

あ

※修||ながい

此地には、高山峻嶺、茂林脩竹有り、

又た

ま

清流激湍

せいりゆう

げきたん

有りて

あ

左右に

さゆう

映帶す

えいたい

※湍||早瀬・急流

※映||映の俗字

又た清流激湍有りて、左右に映帶す。その上にきれいな流れと早瀬とは、あたりに照り映えている。

引いて

ひ

以て

もつ

流觴曲水

りゅうしやう

きやうすい

を為し

な

其の

そ

次に

じ

引いて以て流觴曲水を為し、其の次に列坐す。それを引いて杯を流す曲水をつくり、人びとは順次に並んで坐った。

※觴||さかずき・酒杯

【参考文献】二玄社 精選 拓大法帖2 蘭亭序 馮承素摹本 東晋 王羲之

マール社 書聖名品選集2 王羲之 蘭亭序・十七帖

に列坐す

れつざ

蘭亭序 (3)

絲竹管弦之盛無しと雖も
しつしやくわんげん
 一觴一詠
いつしやくいつげい
 亦た以て幽情を暢叙するに足る。
またひそめられた感情をのび
 天朗らかに氣清み
てんほかにきす
 惠風和暢す
けいふうわちやう

一觴一詠
いつしやくいつげい
 二た
ふた
 以て
もつ
 幽情を
ゆうじやう
 暢叙
ちやうじやう

するに
するに
 足る
た

絲竹管弦の盛無しと雖も、一觴一詠、亦た以て幽情を暢叙するに足る。
 竹と糸の、管絃の華やかさはないとはいえ、一杯の酒に一首の詩は、また秘められた感情をのび
 やかに表わすのに充分である。

是の日也
このひ
 天朗
てんほかに
 氣清み
きす

是の日や、天朗らかに氣清み、惠風和暢す。
 この日は、空は晴れ大氣はすみ、恵みの風はやわらかに吹きわたっている。

惠風和暢す
けいふうわちやう

【参考文献】二玄社 精選 拡大法帖2 蘭亭序 馮承素摹本 東晋 王羲之

マール社 書聖名品選集2 王羲之 蘭亭序・十七帖

蘭亭序 (4)

仰あお

いで

宇宙うちゆう之大の だい

を

觀み

俯ふ

して

品類ひんるい

之の盛せき

んなるを

察さつ

す

所ゆえ

に

目め

を

遊あそ

ばしめ

懷わい

を

騁は

せ

仰あおいで宇宙の大を觀み、俯ふして品類の盛せきんなるを察さつす。
 所以ゆえに目を遊あそばしめ懷わいを騁はせ、
 広大な宇宙を仰あおぎ見、盛せきんな万物を見おろして察さつし、それゆえ気ままに眺ながめ思おもいを馳はせ、

以もつ

て

視し聽き之の

娛たの

しみを

極きわ

むるに

足た

れり。

以て視聽の娛たのしみを極きわむるに足たれり。信まことに樂たのしむ可べきなり。
 そうすることで充分に目と耳の娛たのしみをつくすのは、実まことに樂たのしいことである。

信まこと

に

樂たの

しむ

可べ

き

也なり

形骸けいがいの外のに放浪ほうろうす

形骸の外に放浪す。
肉体の外に自由に振る舞う。

趣舍しゆしゃ萬殊ばんしゆにして静躁せいそう同おなじからずと

趣舍万殊にして、
行為は無限に異なり、動静も同じではないといえ、
静躁 同じからずと雖も、

雖しゆんも

其その遇あう所しゆんに欣しんびしん軽けいく己おのれに得うるに

當あたっては

其の遇う所に欣び、
その境遇を喜び、
暫く己れに得るに当たっては、
しばし自分の意のままになる場合は、

蘭亭序 (7)

快然 おつぜん

として

自 みずか

ら

足 た

り

老 おい

之 の

將 まじ

に

に

至 いた

らんとするを

知 し

らず

不

快然として自ら足り、老の將に至らんとするを知らず。

気持ちよく満足して、老年が近づいてくるのも気づかない。

其 そ

の

之 ゆ

く

所 ところ

既 すで

に

倦 う

み

情 じょう

は

事 こと

に

随 したが

いて

遷 うつ

る

に

及 およ

んで

其の之く所既に倦み、

そのゆきつくところにあきてくると、

情は事に随いて遷るに及んで、

感情は対象に従って移ろい、

【参考文献】

二玄社 精選 拡大法帖2 蘭亭序 馮承素摹本 東晋 王羲之

マール社 書聖名品選集2 王羲之 蘭亭序・十七帖

蘭亭序 (8)

感慨かんがい

之これ

係かか

われり

感慨かんがい 之これに係かかわれり。
感慨もそれにつれて変わってしまう。

欣よんこ

所ところ

は

俛仰ふんぎょう之間の

以す

に陳迹ちんせき

と為な

るも

向まの欣きぶ所ところは、
以前の喜よろこびは、
俛仰ふんぎょうの間かん、以もに陳迹ちんせきと為なるも、
みるみるうちに過去の跡あととなってしまうが、

猶な

お之これ

を以もつ

て懷おも

を興おこ

ささ

能あた

わ

猶なお之これを以もつて懷おもを興おこささる能あたわす。
なおそれでさえも心を動かさずにはおれないのである。

不

【参考文献】ニ玄社 精選 拡大法帖2 蘭亭序 馮承素摹本 東晋 王羲之
マール社 書聖名品選集2 王羲之 蘭亭序・十七帖

蘭亭序 (9)

況いわんや脩短しゅうたんは化かに随したがい

終ついに盡つくるに期きするをや

況いんや脩短しゅうたんは化かに随したがい、
まして命の長短は物の変化に従い、ついには尽きることにきまっているのである。
終ついに尽つくるに期きするをや。

古こ人じん云いう
死し生せいも亦また大だいなりと

古人云う、死生も亦た大なりと。
昔の人も、生と死はやはり大切なことだといったが、

豈あに痛いたましからずや

豈あに痛いたましからずや。
どうして痛ましくないのであろうか。

不ふ裁さい

【参考文献】ニ玄社 精選 拓大法帖2 蘭亭序 馮承素摹本 東晋 王羲之

マール社 書聖名品選集2 王羲之 蘭亭序・十七帖

蘭亭序 (10)

毎つねに昔せき人じん興こう感かん之の由よしを攬みるに

一契いつけいを合がっするが若じやくし

毎つねに昔せき人じん 興こう感かんの由よしを攬みるに、
 昔せきの人が感慨かいがいをもよおした理由りゆうを見るたたびに、
 一契いつけいを合がっするが若じやくし。
 それそれが割わりり符ふを合あわせたように同どうじてああれば、

未いまだ嘗かつて文ぶんに臨のぞんで嗟さ悼とうせずんばああらず

未いまだ嘗かつて文ぶんに臨のぞんで嗟さ悼とうせずんばああらず。
 その文ぶんを見るたたびに歎なげき悼いたまずにはおおれないが、

之これを懷おもいに喻たとへず

之これを懷おもいに喻たとへず能あたわあず。
 それを心こころにささとすこことがでできない。

不

不

【参考文献】ニ玄社 精選 拓大法帖2 蘭亭序 馮承素摹本 東晋 王羲之
 マール社 書聖名品選集2 王羲之 蘭亭序・十七帖

蘭亭序 (11)

固こより死し生せいを一いつにするは虚きょ誕たんたり

固より死生を一にするは虚誕たり、
もとより死と生を同一視するのはいつわりであり、



彭ほう殤しょうを齊せいしくするは妄もう作さくたるをし知しる

彭殤を齊しくするは妄作たるを知る。
彭祖と若死にの者をひとしくするのも、てたらめであるとは知っているものの、



後のち之の今いまを視みるもまた由なお今いま之の昔むかしを

視みるがかなごとし悲しいかな

後の今を視るも、
亦た由お今の昔を視るがごとし。悲しいかな。

後の人のが今のの我われを視るのも、
また今のの我われが昔を見るようであるとは、悲しいことである。

【参考文献】二玄社 精選 拡大法帖2 蘭亭序 馮承素摹本 東晋 王羲之

蘭亭序 (12)

故に時人を列叙し其の述ぶる

所を録し世殊なり事異なると雖も

故に時人を列叙し、其の述ぶる所を録し、
 それゆえこのとき集った人びとの名を列記し、彼らが述べたところを書きとめておく。世が異なり事が変わっても、

懐を興す所以は其の致は一なり也

懐を興す所以は、其の致は一なり。
 思いを発する理由は、結局、同じであろうから。

後之攬る者、亦た將に斯の文に感ずる有らんとす

後世の見る人も、またこの文章に心を動かさうとすることであろう。

感ずる有らんとす

【参考文献】ニ玄社 精選 拡大法帖2 蘭亭序 馮承素摹本 東晋 王羲之
 マール社 書聖名品選集2 王羲之 蘭亭序・十七帖

蘭亭序 (釈文)

永和九年(三五)、癸丑の歳、三月の初め、会稽山陰の蘭亭に集つたのは、禊を行なうためである。立派な人たちはすべて至り、老いも若きもみな集つた。この地には、高い山けわしい峰、茂った林と長い竹とがあり、その上にきれいな流れと早瀬とは、あたりに照り映えている。それを引いて杯を流す曲水をつくり、人びとは順次に並んで坐つた。竹と糸の、管絃の華やかさははいえ、一杯の酒に一首の詩は、また秘められた感情をのびやかに表わすのに充分である。

この日は、空は晴れ大気はすみ、恵みの風はやわらかに吹きわたっている。広大な宇宙を仰ぎ見、盛んな万物を見おろして察し、それゆえ気ままに眺め思いを馳せ、そうすることて充分に目と耳の娛しみをつくすのは、実に楽しいことである。

そもそも人は互いにこの世の中で暮らしてゆくにも、ある者は胸の想いをとりだして、一室の中で語りあい、ある者は好むところに従つて、肉体の外に自由に振る舞う。行為は無限に異なり、動静も同じではないとはいへ、その境遇を喜び、しばし自分の意のままになる場合は、気持ちよく満足して、老年が近づいてくるのも気づかない。そのゆきつくところにあきてくると、感情は対象に従つて移ろい、感慨もそれにつれて変わってしまう。以前の喜びは、みるみるうちに過去の跡となつてしまふが、なおそれでさえも心を動かさずにはおれないのである。まして命の長短は物の変化に従い、ついには尽きることになりまわつてるのである。昔の人も、生と死はやはり大切なことだといったが、どうして痛ましくないのであろうか。

昔の人が感慨をもよおした理由を見るたびに、それが割り符を合わせたように同じであれば、その文を見るたびに歎き悼まずにはおれないが、それを心にさとすことができない。もとより死と生を同一視するのはいつわりであり、彭祖と若死にの者をひとしくするのも、てたらめてあるとは知っているものの、後の人が今の我われを見るのも、また今の我われが昔を見るようであるとは、悲しいことである。それゆえこのとき集つた人びとの名を列記し、彼らが述べたところを書きとめておく。世が異なり事が変わつても、思いを発する理由は、結局、同じであらうから。後世の見る人も、またこの文章に心を動かそうとすることであらう。

●原文

永和九年。歳在癸丑。暮春之初。會于會稽山陰之蘭亭。脩禊事也。羣賢畢至。少長咸集。此地有崇山峻嶺。茂林脩竹。又有清流激湍。映帶左右。引以為流觴曲水。列坐其次。雖無絲竹管絃之盛。一觴一詠。亦足以暢敘幽情。是日也。天朗氣清。惠風和暢。仰觀宇宙之大。俯察品類之盛。所以遊目騁懷。足以極視聽之娛。信可樂也。夫人之相與俯仰一世。或取諸懷抱。悟言一室之內。或因寄所託。放浪形骸之外。雖趣舍萬殊。靜躁不同。當其欣於所

●訓読

永和九年、歳は癸丑に在り。暮春の初め、会稽山陰の蘭亭に會す。禊事を脩むるなり。群賢畢く至り、少長咸な集まる。此地の地、崇山峻嶺、茂林脩竹有り、又た清流激湍有りて、左右に映帶す。引いて以て流觴曲水を為し、其次に列坐す。絲竹管絃の盛無しと雖も、一觴一詠、亦た以て幽情を暢叙するに足る。是の日や、天朗らかに気清み、惠風和暢す。仰いて宇宙の大を觀、俯して品類の盛んなるを察す。所以に目を遊ばしめ懷を騁せ、以て視聽の娛しみを極むるに足れり。信に楽しむ可きなり。夫れ人の相い與に一世に俯仰するや、或いは諸を懷抱に取つて、一室の内に悟言し、或いは寄せて託する所に因つて、形骸の外に放浪す。趣舍万殊にして、靜躁同じからずと雖も、其の遇う所に欣び、暫く己れに得るに当たつては、快然として自ら足り、老の將に至らんとするを知らず。其の之く所既に倦み、情は事に隨いて遷るに

遇。暫得於己。快然自足。不知老之將至。及其所之既倦。情隨事遷。感慨係之矣。向之所欣。俛仰之間。以為陳迹。猶不能不以之興懷。況脩短隨化。終期於盡。古人云。死生亦大矣。豈不痛哉。每覽昔人興感之由。若合一契。未嘗不臨文嗟悼。不能喻之於懷。固知一死生為虛誕。齊彭殤為妄作。後之視今。亦由今之視昔。悲夫。故列敘時人。錄其所述。雖世殊事異。所以興懷。其致一也。後之覆者。亦將有感於斯文。

及んで、感慨之に係われり。向の欣ぶ所は、俛仰の間、以に陳迹と為るも、猶お之を以て懷を興さざる能わず。況んや脩短は化に隨い、終に尽くるに期するをや。古人云う、死生も亦た大なりと。豈に痛ましからずや。毎に昔人興感の由を覆るに、一契を合するが若し。未だ嘗て文に臨んで嗟悼せずんばあらず。之を懷に喻す能わず。固より死生を一にするは虚誕たり、彭殤を齊しくするは妄作たるを知る。後の今を視るも、亦た由お今の昔を視るがことし。悲しいかな。故に時人を列叙し、其の述ぶる所を録し、世殊なり事異なると雖も、懷を興す所以は、其の致は一なり。後の覆る者、亦た將に斯の文に感ずる有らんとす。